



TITLE:

現代経済学の起源(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

荒川, 章義

CITATION:

荒川, 章義. 現代経済学の起源. 京都大学, 1997, 博士(経済学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202264>

RIGHT:

氏 名	あら かわ あき よし 荒 川 章 義
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	経 博 第 47 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	経 済 学 研 究 科 理 論 経 済 学・経 済 史 学 専 攻
学位論文題目	現代経済学の起源

論文調査委員	(主 査) 教 授 八木紀一郎	教 授 西村和雄	教 授 瀬地山敏
--------	--------------------	----------	----------

論 文 内 容 の 要 旨

現代の経済学における支配的経済理論が、各主体の最適化行動から導かれた需要関数と供給関数をもとにすべての生産物市場と生産要素市場における均衡の連続として経済現象を把握しようとする新古典派理論であることは、それに賛成するか反対するかは別として、ほとんど異論のないところであろう。この理論の起源は19世紀のいわゆる限界革命にまで遡るが、第二次大戦以前には、この理論もまだその圧倒的地位を確立していなかった。本論文は、この理論体系が、1950年前後に、どのようにその現代化を果たしてその優位を確立するにいたったかを、その理論構造のインプリケーションを解明することによって論じたものである。

第1章「＜最適化仮説＞の成立」で本論文がまずとりあげるのは、一般均衡理論の両輪である企業の利潤最大化仮説と消費者の効用最大化仮説の双方において、この仮説を非実体化することによって、現実からの遊離という批判に免疫を与える論文が、1950年に時をおなじくして出現したことである。その一つは、現実の企業の多くが利潤最大化行動をとっていないとしても、長期的に見れば競争的な淘汰過程が存在するがゆえに、存続しうる正常な企業はそのような行動をとっているとみなすのが適当であるという A. アルチャンの論文であり、これは仮説の非現実性を当然とする M. フリードマンの見解と結びついて利潤最大化仮説に対する現実主義的批判を沈黙させた。他方では、消費者需要の理論から「主観主義的要素」を追放するパレート=ヒックス的プログラムが、実際に市場で観察されるデータのもとでの消費者選択の「一貫性」を要求するだけの「顕示選好」理論として、サムエルソンおよびハウタッカーによって完成させられた。

しかし、＜均衡＞概念を取り上げた第2章では、一般均衡理論の創始者である L. ワルラスにとってその理論が彼なりの「科学的社会主義」を表明した規範的な理論であったことと、変動のある過程のもとでの＜均衡＞の科学的分析の先駆者であった R. フリッシュにおいては景気変動の実証的分析が課題とされていたことが指摘される。＜均衡＞概念は、その起源においては、けっして非実体的な形式主義的概念で

はなかった。

第3章では、とくにサムエルソンの『経済分析の基礎』における「静学」と「動学」の経済分析への導入が、A. ロトカの『数理生物学原理』にヒントを得たものであるということが指摘される。本論文によれば、ロトカの生物学は、「力学」に由来する数理的「形式」に経済学的意味を与えるさいに、その模範を提供したのであった。本章ではさらに、フリッシュ型の景気循環モデルにおける実体的な均衡概念が現在のリアル・ビジネス・サイクル理論にも貫いていると論じられている。

第4章と第5章は、現代経済学にとっての古典力学のアナロジカルな意義という、しばしば曖昧に語られる両者の親縁関係を、両者の数理構造を対比して厳密に論じたものである。前者における価格の場（price field）における消費者行動と生産者行動の理論が、保存的力学場（conservative mechanical field）におけるハミルトン原理に対応することが指摘される。いいかえれば、「経路独立的」でない「不可逆的」な「消散系」として経済を把握することは、現代経済学にとってもノン・スタンダードの立場にたつことを意味するのである。

第6章では、経済学と生物学の奇妙な関係を、生物学においてダーウィンの進化論がもたらした転換を軸にして考察する。ダーウィンによって、それ以前の「完全適応」が行なわれた調和的な生物世界の像が崩壊し、生物的な他者からなる有機的環境に対する「相対適応」と「突然変異」による種の「分化」のプロセスがあらわれたが、ダーウィンの着想の基礎にあったのは、スミスの「分業」の理論とマルサスの人口論＝生存競争論であった。この章では、ダーウィン流の進化論に対応する経済学内部での理論化として独占的競争論があげられているが、それは生物学におけるダーウィニズムと異なって、経済学内部では勝利をおさめることができなかった。

第7章では、やはり1950年代に成立したアロー＝ドブリューの凸集合と位相空間理論を用いた一般均衡モデルの登場が、数学・物理学における古典主義の没落後の形式主義の登場と相即していることが論じられる。そこでは、「限界主義」の概念のもつ局所性がしりぞけられ、primitiveな概念のみにもとづいて一般均衡の存在証明が追求された。この形式主義的手法が許容する一般性は、しばしば均衡達成への障害とみなされる不確実性をも商品の属性の拡張（条件付商品）として包括しうほどのものである。

第8章と第9章は本論文のフィナーレであり、現代的な一般均衡理論の構築の背後のモチーフが分権的な資本主義経済という経済秩序の理論的正当化としての意味をもっていたことを論じている。完全競争経済のもとで（強い意味での）凸の選好関係をもつ消費者は、価格情報さえ与えられれば、自分だけで最適な意思決定をおこなうことができるという独我論的世界観がそこに表明されていると論じられる。しかし、本論文の筆者は、こうした一般均衡理論構築者の政治的モチーフが必ずしも成功したとはみていない。なぜなら、こうした理論と現実の経済過程との関連を考えるならば、ハイエク的な分権的市場経済の擁護はこの理論とは異質なものとわざるをえないし、まだ「完全競争」という条件は、「非加算無限」の濃度をもつ主体から構成される経済を前提とするからである。この条件がみたされない状態での一般均衡の達成は、企業に価格受容者に留まることを強制し、均衡価格の裁定者としてのせり人の存在に依存する。それはむしろ、社会主義経済計算論争においてランゲ＝ラーナーによって提示された社会主義でしかないのである。このような皮肉な確認をおこなったうえで、本論文は経済社会の理解＝理論化のありかたについ

でも理論＝意識と存在＝経済機構の相互規定関係があることを示唆して閉じられる。

論文審査の結果の要旨

経済理論の学史的な研究は、近年いちじるしい前進を遂げているとはいえ、ケインズ経済学をのぞけば、1950年代以降の現代経済学の基本理論にまでは及ばなかった。一般均衡理論についても、これまであった研究は、1870年代の限界革命から世紀転換期にいたるワルラス、パレート、ヴィクセル、シュンペーターらの個人に即した研究にとどまっていた。学位請求者も修士論文においてワルラスの一般均衡理論をとりあげて、その規範的な性格について論じたことがある。本論文では、その着想をも生かしながら、1950年代に精緻化された一般均衡理論に挑み、その理論構造とともにそれが支配的経済理論となったことの意味をときあかした。アメリカに Ph. ミロウスキーなどの先例があるとはいえ、経済学史的研究としてきわめて野心的な論文である。

本論文の基本的な主張は、1950年代における経済理論の形式化は、古典的な実体主義的な理論の否定という表面の背後に、現実との関係におけるある「意味」をもっていったということである。高度の一般化を可能にする形式主義は、主観的な効用や限界代替率といった実体的、あるいは局所的な概念に制約されないから、問題となる現実との関係における意味は現実主義的なものではありえない。それはむしろ、規範的な意味における現実との関係、つまり、政治的なモチーフだというのが学位請求者の見解である。

本論文は、利潤最大化仮説の現実適合性に対する疑問を進化論的解釈によって封じたアルメン・アルチャンの論文からはじまり、一般均衡理論の形式主義化の最高の理論的達成であるアロー＝ドブリューモデルまで論じ及ぶ。その間を貫いているのは、国家的な介入を原則的に拒否し、分権的な資本主義経済を正当とするモチーフである。学位請求者は、現代における経済理論の展開やその受容可能性が陰に陽にこのモチーフによってガイドされているといたいのであろう。学位請求者がこのモチーフによる企画を成功した企てと見ていないことは、アロー＝ドブリューモデルに現実的な姿を与えるとすれば、中央計画局をせり人としてもつ市場社会主義にならざるをえないと皮肉をまじえながら論じていることから明らかである。このように、現代的理論の精髓を的確に把握しながら、なおかつ距離を保ったスタンスによって1950年代の理論動向を整理していく手腕は見事であり、開拓的な仕事としても十分な成功を収めている。しかし、問題の政治的モチーフの存在とその意義については、そのような側面が一部にあること、あるいはそうした解釈も可能であるということと、現実の（多数の）理論家に即して実証がおこなわれることは同じことではない。後者の意で政治的モチーフが作用したと主張するのであれば、断片的な伝聞や推測にとどまらない根拠付けがなお必要とされるであろう。

本論文のいま一つの貢献は、今世紀の数学・物理学（力学）・生物学などの自然科学の転回との相互作用のもとに1950年代における経済理論の現代を描ききったことである。経済学における最適化行動が物理学（力学）における保存的力学場におけるハミルトン原理と対応することが論じられるだけでなく、アロー＝ドブリューによる位相空間理論を用いた高度に形式主義的（抽象的）な一般均衡モデルが、古典力学・数学系を没落させた自然科学における公理主義的転回に照応したものであることが論じられている。さらに印象的なのは、経済学と生物学との相互交渉である。「経済学者のめざすべきメッカは経済生物学で

ある」というマーシャルの有名なことばにもかかわらず、経済理論は概して生物学の理論からは疎遠であったというのが一般の通念であるが、本論文では生物学（A. ロトカの『数理生物学原理』）は力学に由来する均衡記述の数理的形式に社会的事象に適用可能な「意味」を与える模範として大きな役割を果たしたことが論じられている。他方では、ダーウィン進化論がそれ以前の完全適応型の生物世界像から相対適応と突然変異の生物世界像をもたらしたことが、完全競争論にかわる独占的競争論の登場と対比させられる。しかも、このダーウィンの転換は、マルサスの宿命論的生存競争論のみならず、スミスの分業論に示唆を受けたものであったと論じられる。しかし、独占的競争理論が経済学において支配的地位を確立することに失敗する一方で、進化論的議論が最大化仮説の形式主義的擁護に用いられた。こうした経緯を理論構造に即して提示した本論文は、現在、「進化経済学」の名のもとに関心が高まっている経済学の生物学的モデルという議論を考えるうえでも、多大な示唆を含んでいる。本論文は、今世紀の現代経済学の理論化が学際的な交渉をうちに含むインテレクチュアル・ヒストリィをなしていることを如実に示したものとしても評価できよう。

すでに述べたように、本論文は経済理論の学史的研究の射程を現代の経済理論家たちがベースとしている1950年代の理論的刷新の段階にまで前進させた開拓的な業績である。もちろん、この課題は本論文のような単独論文だけで果たされる課題ではないが、本論文で学位請求者はその基礎を提供したといっていよう。学位請求者自身が積極的に評価する理論的立場については行論のなかから間接に読み取らねばならないというもどかしさもあるが、これは現代的な均衡理論が支配的となったのは、どのような革新と、どのような了解によってであったのかを解明するという批評的スタイルが採用されていることによるものであり、本論文の価値を低めるものではない。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成9年1月22日論文内容と、それに関連した試問を行なった結果合格と認めた。